

田中 一郎 著

ガリレオ裁判

——400年後の真実

紹介者 美那川 雄一



岩波書店

2015年10月

新書判

236ページ

本体780円

目次

はじめに

- 第1章 ガリレオを愛したナポレオン
- 第2章 宗教裁判
- 第3章 天文観測による発見——興奮と忍び寄る危機
- 第4章 序幕——1616年の宗教裁判
- 第5章 『天文対話』
- 第6章 裁判の開始
- 第7章 第1回審問——1633年4月12日
- 第8章 第2回審問——4月30日
- 第9章 第3回審問——5月10日
- 第10章 判決
- 第11章 「それでも地球は動いている」

おわりに

主要登場人物

あとがき

主要参考文献

「それでも地球は動いている」とつぶやき科学者としての信念をつらぬいたガリレオ・ガリレイ。

科学史家の田中一郎は、本書において「科学の人」としてのガリレオの神話解体を宗教裁判史料にもとづき丁寧にこなしている。そもそも、「科学者」という言葉そのものが19世紀になってつくられ、17世紀に「科学」という考え方はなかった。ガリレオはトスカナ大公付き首席「数学者」であり「哲学者」であった。そのガリレオの崇高な科学者としての「神話」はどのようにつくられたのか、本書は19世紀ナポレオンのローマ侵攻により、ガリレオの裁判記録がフランスに移送されることから話が始まる。

第2章では、16・17世紀のヨーロッパ世界が依然として宗教的権威の世界であったことを宗教裁判の側面から説明する。そして、第3章以降がガリレオの登場となる。金星の満ち欠けに関する主張など、ガリレオの思想は当初から拒絶されたわけではなかった。当時、ローマは学問の中心地であり、イエズス会の設立したローマ学院などは最新の科学的知識を受容しており、高位聖職者のなかにはガリレオの天体に関する考え方に好意的な者もいたためである。著者は一次史料をあげて、ガリレオを取り巻く人間関係を整理している。

しかし、ガリレオがローマにおける支持者を失うと、形勢はかわった。ガリレオの『天文対話』を読んだ教皇から差し押さえ命令が出される。教皇にとっては、問題はガリレオの天文に関する理論の科学的妥当性ではなく、「信仰と宗教にかかわること」としてとらえられた。教皇を頂点とした教会官僚制の性格、そして当時のパトロン・クライアント関係の政治的性格が裁判に影響した。本書は「科学と宗教の対決」というガリレオ裁判に関する伝統的な言説に対して異なる視点から追究することで、近世に生きたガリレオの姿を浮かびあがらせる。

「近世」という時代を「人間なるものの神からの解放」と単純化したり、啓蒙思想を伝統的なキリスト教信仰と切り離したりする見方は古くなった。本書は、ガリレオの生きた時代を裁判史料にもとづいて再構成することに成功している。そして18世紀以降ガリレオはどのように語られるようになったのか、英雄としてのガリレオの「物語」を時代背景とともに考えさせる。宗教裁判の背景、原因、結果そして後世への影響を史料にもとづき考察することで、ガリレオの真実にせまる一冊である。

(みながわ・ゆういち/静岡県立小山高等学校教諭)

渡辺 信一郎 著

シリーズ 中国の歴史 1 中華の成立 ——唐代まで

紹介者 小川 正樹



岩波書店

2019年11月

新書判

266ページ

本体 840円

目次

いま、中国史をみつめなおすために——シリーズ
中国の歴史のねらい

はじめに

- 第1章 「中原」の形成——夏殷周三代
- 第2章 中国の形成——春秋・戦国
- 第3章 帝国の形成——秦漢帝国
- 第4章 中国の古典国制——王莽の世紀
- 第5章 分裂と再統合——魏晋南北朝
- 第6章 古典国制の再建——隋唐帝国

おわりに

図表出典一覧

主要参考文献

略年表

索引

本シリーズの特徴は、中国社会を理解することの難しさを改めて認識させてくれることである。従来の王朝や時代区分で輪切りにした説明では中国社会の多元性や多様性を説明しつくすことはできない、と執筆陣は強調する。王朝の枠組みを取り払い、草原・中原・江南・海域という区分から改めて中国史を考える、という視点は新鮮である。世界史担当者からすると納得のいく説明が展開され、通説を改める叙述は爽快ささえ感じる。

第1巻は原始・古代から唐代前半までを扱い、「中国はいかにして中国になったか」を叙述していく。中国社会が黄河文明以降、周辺地域との交流を経て形成されたことはもちろん自明である。しかし、本書のなかで行政制度・税役制度・兵役制度・儀式儀礼が紆余曲折を経ながら、どのように形成されてきたのか、を同時代の文献や新たな発掘成果にもとづいて叙述されるのを読むと、自分の理解が何と表面的であったのか、と衝撃を受ける。

教科書の記述は、その当時の研究成果が反映されるが、それらは歴史学の発展によってつねに上書きされる必要があること、その記述に誤りがある場合も、正しい記述に訂正される必要があることを再認識した。歴史学は科学であり、根拠にもとづいて、論理的に思考し、合理的な説明をしなければならない。歴史を教えるということは、教科書を正確に理解させるだけではない。最新の研究成果ではどう説明されているのか、を生徒にも伝えて考えさせる営みであるべきである。歴史を暗記科目と認識させないためには、教授者による不断の探求が必要であり、本書はその刺激を読者に十分に与えてくれる。

唐代の文献には「均田」「租調庸」という用語は使用されておらず、これらは宋代の文献ではじめて用いられたという指摘は、自分たちが常識として教えてきたことが、実は後世に言い換えられたものであって、決して当時を正確に説明したものではなかったことに驚かされる。「府兵制」の崩壊は、秦国以来の民衆統治の理念が根本から変更されたことを意味するという指摘も、春秋戦国時代から隋唐帝国までの税役・兵役・法制の変遷を俯瞰しなければ決して理解することはできない。

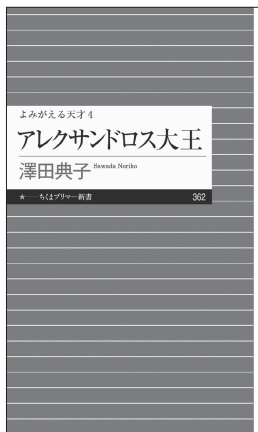
中国という国の形は、たんに王朝や民族が交替して成立してきたわけではない。戦争や混乱、拡大や縮小のなかで、中国とはいかにあるべきかを考え続ける人々によって作り上げられてきた願望であり、それは現在も続いていることを私たちは忘れてはならない。

(おがわ・まさき／函館ラ・サール中学校・高等学校教頭)

澤田 典子 著

よみがえる天才4 アレクサンドロス大王

紹介者 角田 展子



筑摩書房

2020年11月

新書判

240ページ

本体 860円

目次

はじめに——ヴェルギナのアレクサンドロス

第1章 アレクサンドロスに迫る

第2章 東地中海世界とマケドニア

第3章 アレクサンドロスの登場

第4章 ペルシア帝国の打倒

第5章 果てしない征服

第6章 シンボルとしてのアレクサンドロス

あとがき

アレクサンドロス年表

主要参考文献

昨今の歴史教育のトレンドは「固有名詞ではなく歴史概念を教える」である。その観点から考えると歴史上の人物、とくにアレクサンドロスのような「英雄」をどう扱うかは悩ましい。本書によって、英雄の伝えられ方を提示することで生徒に「歴史とは解釈である」ということを理解させる、という視座を与えられた。

本書はたんにアレクサンドロスの詳細な伝記ではない。この人物がどのように語られてきたのかという「アレクサンドロス伝」について、その神話化・伝説化の過程をアレクサンドロスの同時代から、現代の映画におけるアレクサンドロスの描き方まで説きおこす、「アレクサンドロス伝説の歴史」とでもいえる内容こそが本書のテーマであろう。

アレクサンドロスを英雄視し、範と仰ぎ、みずからを重ねあわせようとするローマの権力者たち。一方で、それらの権力者を批判する側からはアレクサンドロスは暴君で独裁者であるとして非難する論調も表れる。やがてプルタルコスによって「完ぺきな哲人王」「パイディアを体現する英雄」としてのアレクサンドロス像が完成する。これがルネサンス期以降「再発見」され、大きな影響を与えることとなった。一方、大衆むけの空想伝奇物語「アレクサンドロス・ロマンス」の主人公として彼の名は語り継がれ、イスラーム世界でも理想の英雄として知られる。このようなかたちで後世に名が残る歴史上の人物がほかにいるだろうか。

近世以降、ルイ14世やナポレオンなど、様々な人物が彼に憧れ、「アレクサンドロス模倣」を展開する。19世紀にはギリシア独立のシンボルとなり、ドロイゼンはドイツ統一に絡めてアレクサンドロスを賞賛し、ターンは国際協調を体現する聖人君子的アレクサンドロス像を提示した。20世紀になると今度はそれが一変し、ファシズム批判のなかで、アレクサンドロスは権力悪を体現する存在として批判され、さらに近年は史料の実証研究の成果からアレクサンドロスの否定的評価がめだってきているという。まさに「アレクサンドロス研究者の数だけアレクサンドロス像が存在する」という言葉通りである。

「歴史総合」の指導要領では「歴史の特質と資料」という項目が新設され、歴史は資料にもとづいて叙述されていること、資料を取り扱う際の留意点などを生徒に理解させることになった。「歴史の語られ方」というテーマで生徒が探究的な活動をおこなうと想定した場合、本書は非常に有効な手引きとなるに違いない。

(つのだ・ひろこ／東京都立青山高等学校指導教諭)

ウルリヒ・ヘルベルト 著
小野寺 拓也 訳

第三帝国 ——ある独裁の歴史

紹介者 三森 朋恵



KADOKAWA

2021年2月

新書判

264ページ

本体 1,000円

目次

- 第1章 第二帝政と第三帝国
- 第2章 第一次世界大戦後
- 第3章 ヴァイマル共和国の右派
- 第4章 ナチによる「権力掌握」
- 第5章 迫害
- 第6章 経済と社会
- 第7章 拡張
- 第8章 戦争への道
- 第9章 戦争の第一段階——1939～41年
- 第10章 暴力の爆発
- 第11章 バルバロッサ
- 第12章 絶滅政策
- 第13章 戦争と占領
- 第14章 戦時下の民族共同体
- 第15章 ドイツ国内での抵抗
- 第16章 終焉
- 第17章 おわりに

第二次世界大戦前後のドイツについて、演説や報告書の言説を紹介しながら、新書という文章量で述べられているのが本書である。ナチ党が勢力を拡大させていく過程やその施策は、授業でもよく取り扱う内容だが、とくに印象的であったこと、連想し考えたことについて述べたい。

1点目は、「我々」の射程についてである。ナチ党が勢力を拡大するなかで、ユダヤ人をはじめ、共産主義者や障がい者、性的少数者に対する虐殺行為がおこなわれた。これらの行為が、「ドイツ国民」が生存し発展していくための正当な理由として語られていた様が、当時の体制側の報告書や演説内容の引用とともに浮き彫りにされている。そのうえで、「ドイツ国民」という共同体・共通理念の創出が戦争の継続を担保し、またその担い手である「ドイツ国民」を戦争から逃さない関係図を形成したという視座を読者に提供している。「我々」を顕在化させる装置として、前述のユダヤ人たちの「他者性」が強調された構図は、現代においてなお、大きな問いを突きつけているのではないか。ヴェルサイユ体制下での対独報復の措置と大戦勃発の相関は教科書や副教材にも詳しいが、本書のような見方を史資料を通じ生徒に体得させる授業も、今後より一層求められよう。

2点目として現代社会に照らしてみたい。いたずらに戦時下と現代を重ね見るべきではないかもしれないが、コロナ禍等々、現状への不満ややるせなさによって攻撃性をおびる動きが、「自粛警察」「上級国民」といった言葉で表れているように思われる。本書でも、戦争が悲惨さを増すにつれ、自身やその家族の生活を守ることで精一杯となっている人々へ眼差しが向けられている。思考停止状態となる、ならざるをえない状況といえる大戦下ドイツ社会の様相を置き換えてみれば、困難や窮地におちいった人間の側面の共通性を見出せるのではないか。情緒的な思考・言動が求心力をもち、客観性が軽んじられてしまう傾向がありはしないか。

史資料にもとづき考察したり検証したりする技能・態度の養成は、地理歴史科の役割の1つだ。しかし読了後、歴史的事象に接した際どのような感情をいだき、行動につなげるのかという営みに、より重点をおくべきではないかとの思いが強くなった。個人が発し瞬間的に共有されるSNSが当然の時代にあって、生徒たちはどのような言葉とともに主観を形成していくのか。

(みつもり・ともえ／秋田県立大館鳳鳴高等学校教諭)